



62221





伊勢物語古意

むし田村のみづがまう守門のりしりちの女侍多

象子とす

なり

文徳天皇の崩して山城に著聖朝田邑の系丘天安二  
年八月癸酉のりして田村のりしりちの女侍を

文徳天皇崩して三年七月有系部は多か系子為女侍也

兄三代天皇元年十一月八日四位下有系部は多

加系子率多りの系子有右大臣従二位良相之才一女也

種孫

そいつきふりて後乃安福ちまてやいのほごかりし

けり

安祥寺文徳實録ニ齋衡二年六月詔以安祥寺預於定額云云三  
代實録貞觀元年四月ニ縁皇太后御願置安祥寺年分度者三人

卷五



願文曰云々延喜玄蕃式云九安祥寺果階業僧擬補諸國講  
讀師云々其人云々此て云ハ少科云あり云云云云云云の建云  
り云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云  
云云云云

人云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云  
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云  
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云  
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

今分の細は云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

親三年云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

此講云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

此講云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

此講云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

此講云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

此講云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々



三條の太所音ハ貞観八年三月廿八日大内臣良相乃百花亭  
在と拾遺抄ニミケ

三條の太所音ハ貞観八年三月廿八日大内臣良相乃百花亭  
在と拾遺抄ニミケ  
三條の太所音ハ貞観八年三月廿八日大内臣良相乃百花亭  
在と拾遺抄ニミケ  
三條の太所音ハ貞観八年三月廿八日大内臣良相乃百花亭  
在と拾遺抄ニミケ

百花亭三條北朱雀西  
在と拾遺抄ニミケ

三條の太所音ハ貞観八年三月廿八日大内臣良相乃百花亭  
在と拾遺抄ニミケ  
三條の太所音ハ貞観八年三月廿八日大内臣良相乃百花亭  
在と拾遺抄ニミケ  
三條の太所音ハ貞観八年三月廿八日大内臣良相乃百花亭  
在と拾遺抄ニミケ

若人ハ切て  
凡海と今の世人  
ハ切て

若人ハ切て  
凡海と今の世人  
ハ切て  
若人ハ切て  
凡海と今の世人  
ハ切て

昔よりきくか切てはききて前後のちうみぬく家の  
 文をきくか切てはききて前後のちうみぬく家の  
 お伴わぬか切てはききて前後のちうみぬく家の  
 右大將右馬寮を司る時ハ  
 右馬頭を相伴するの時ハ  
 あつて思ふか切てはききて前後のちうみぬく家の  
 親直をいひきか切てはききて前後のちうみぬく家の  
 宗子代表してをききてはききて前後のちうみぬく家の  
 あつて思ふか切てはききて前後のちうみぬく家の  
 宗子代表してをききてはききて前後のちうみぬく家の

昔氏の申す子生れつたはけり

三代実録二行平御之女の  
 皇子うしつる

某の人の氏をもつておつけの氏の中より年々いひ文  
 へん書手抽語されをまゝするに系は乃中りて謂へる  
 け皇子ハ初平アおむため文衣女子貞親十六年ヲ清和の

因は二皇太后の四十の翌  
 皇初はハ八葉にて陸王  
 御初はハ八葉にて陸王  
 御初はハ八葉にて陸王

貞親初をまゝするは年々を  
 御初はハ八葉にて陸王  
 御初はハ八葉にて陸王

和名抄云外祖父母方  
 舅母之昆身或舅母方  
 外舅妻之父为外舅  
 外舅松夫といひおれハ  
 之父同  
 外舅といふは舅のあつて  
 互々其父を相まはし  
 してこゝハ舅が祖父  
 といふ

有るは三日の初をいひけりハ初ハ言ふは初といふは  
 有るは三日の初をいひけりハ初ハ言ふは初といふは  
 有るは三日の初をいひけりハ初ハ言ふは初といふは  
 有るは三日の初をいひけりハ初ハ言ふは初といふは

ちうみぬくか切てはききて前後のちうみぬく家の  
 ちうみぬくか切てはききて前後のちうみぬく家の









しつらとくもさうさうしてふ十餘抄ハ本よりさうさうさうさうさうさ  
うはが抄語さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
まきまきうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
むしうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
なる水邊とつあかきあかりなり年々とのさうさうさうさうさうさ  
いらのさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

五葉水瀧水無瀧  
あれとをりさうさうさうさうさ  
ゆきゆきのさうさうさうさうさ  
ゆきゆきのさうさうさうさうさ  
ゆきゆきのさうさうさうさうさ  
ゆきゆきのさうさうさうさうさ  
ゆきゆきのさうさうさうさうさ  
ゆきゆきのさうさうさうさうさ

惟高祖王ハ文徳の一のさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
虎のちゆあきさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
同ありありハ類聚國史三代實録よりハ水生とみたりかくさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
ありてり水なくさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
ハいとふあまのさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

百葉二和哥とてしす  
て天智のころさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさ

ついでにさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
はさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ









ついでに...

上の...

まらんけいし...

とよみけり...

まき...

あつた...

てげり

三...

出...

三代實録...

さつ...





三代實録云貞觀三年九月伊豆内親王<sup>武</sup>死云桓武天皇皇女母藤原氏從三位之敬女也又云業平者故四品阿保親王第五子正三位行中納言行平之弟也阿保親王娶桓武皇女伊豆内親王生業平云云伊多と及世りてと云むは浮屠日本後紀云伊多を伊都内親と云ふなり又ハ後世云と云ふは伊豆内親が御孫なり度登りてと云ふ用カレ又ありてと云ふは伊多の御孫なりと云ふなり云々

まゝとてこのころに人乃きあやうしならん  
 ろの母なるあつりて所こきみしかりあり子ハありて  
 られはうつとときれとまはくもあやうしとて一  
 けせとてあゝとていなり

古今集より伊豆内親と云ふ業平は此の  
 三代實録云父ハ伊多とて母ハ藤原氏とて伊豆内親と云ふ業平は此の  
 のとてあやうしとていなり  
 子二つ子とあり人々をひりりするの昔も今もなりて  
 麻の子ハ一つ子人々をひりりするの昔も今もなりて  
 例ハ係てひりりて古事記云と云ふは伊多の御孫なり  
 のこと此路ハ後日本紀の宣命云と云ふは伊多と云ふは伊多の御孫なり

昔とてこのころに人乃きあやうしならん  
 ろの母なるあつりて所こきみしかりあり子ハありて  
 られはうつとときれとまはくもあやうしとて一  
 けせとてあゝとていなり

まゝとてこのころに人乃きあやうしならん  
 ろの母なるあつりて所こきみしかりあり子ハありて  
 られはうつとときれとまはくもあやうしとて一  
 けせとてあゝとていなり

まゝとてこのころに人乃きあやうしならん  
 ろの母なるあつりて所こきみしかりあり子ハありて  
 られはうつとときれとまはくもあやうしとて一  
 けせとてあゝとていなり

昔とてこのころに人乃きあやうしならん  
 ろの母なるあつりて所こきみしかりあり子ハありて  
 られはうつとときれとまはくもあやうしとて一  
 けせとてあゝとていなり

まゝとてこのころに人乃きあやうしならん  
 ろの母なるあつりて所こきみしかりあり子ハありて  
 られはうつとときれとまはくもあやうしとて一  
 けせとてあゝとていなり

あつらひりしをさしむるは  
ちづらちづら

あつらひりしをさしむるは  
あつらひりしをさしむるは

あつらひりしをさしむるは  
あつらひりしをさしむるは

あつらひりしをさしむるは  
あつらひりしをさしむるは

あつらひりしをさしむるは  
あつらひりしをさしむるは

あつらひりしをさしむるは  
あつらひりしをさしむるは

あつらひりしをさしむるは  
あつらひりしをさしむるは

あつらひりしをさしむるは  
あつらひりしをさしむるは

あつらひりしをさしむるは  
あつらひりしをさしむるは

あつらひりしをさしむるは  
あつらひりしをさしむるは

あつらひりしをさしむるは  
あつらひりしをさしむるは

あつらひりしをさしむるは  
あつらひりしをさしむるは

あつらひりしをさしむるは  
あつらひりしをさしむるは

















或人月を名て後継を  
 下あけく其後を  
 大いなる事なりとて  
 其やいふ所の何れ  
 夫れを  
 或人月を名て後継を  
 下あけく其後を  
 大いなる事なりとて  
 其やいふ所の何れ  
 夫れを

或人月を名て後継を  
 下あけく其後を  
 大いなる事なりとて  
 其やいふ所の何れ  
 夫れを

昔の事なりとて  
 其やいふ所の何れ  
 夫れを  
 或人月を名て後継を  
 下あけく其後を  
 大いなる事なりとて  
 其やいふ所の何れ  
 夫れを







まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり

まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり  
まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり  
まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり

まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ

まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり  
まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり  
まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり

まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり  
まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり

まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり  
まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり  
まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり

まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ

まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり  
まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ  
りいねをくらり

まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ

まきくはさきあつち中なりきれば細うさうあねむしむ



まゝあふりては、  
 て者のあふりては、  
 本より、  
 の後の、  
 ちやうと、  
 と、  
 ちの、  
 み、  
 人、  
 て、  
 音、  
 る、

あふりては、  
 女、  
 の、  
 らぬ、  
 き、  
 の、  
 二、  
 意、  
 よ、  
 今、  
 ひ、  
 三、



